

作品番号025-1

TAMAGAWA BLDG.



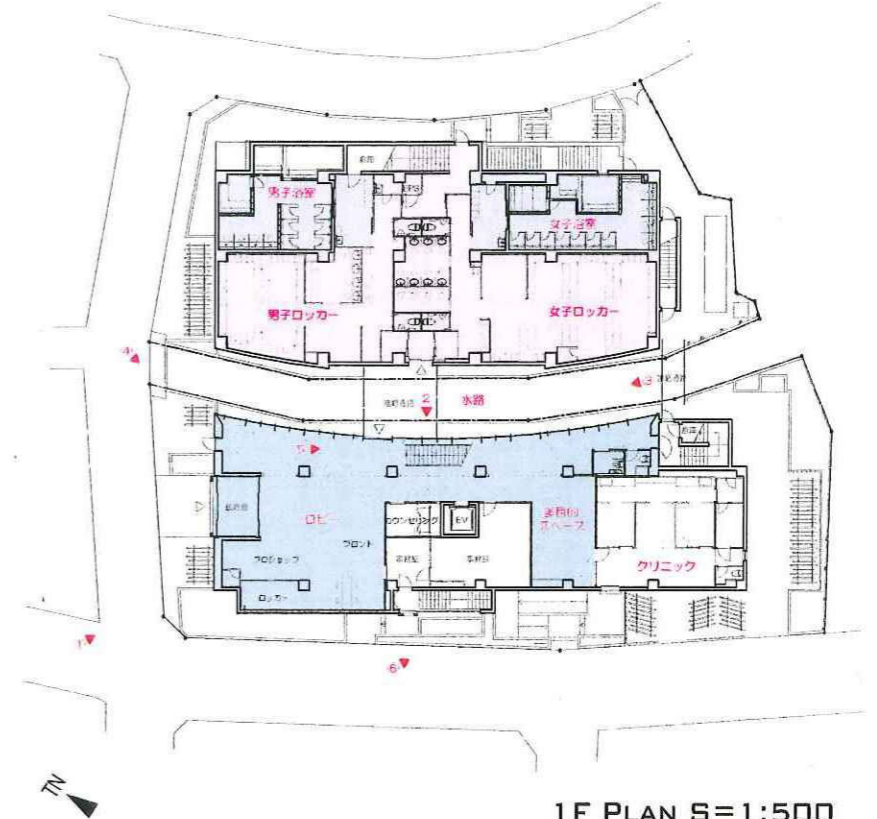
作品番号025-2



①メインエントランス ファサード



②カーテンウォール デテール



1F PLAN S=1:500

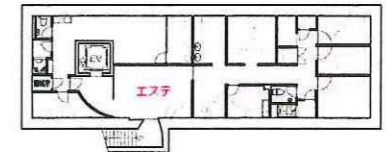
□設計概要

①周辺環境との共生

計画地は、第一種住居地域内の住宅地に位置する。周辺は住宅が隣接し、その環境下でいかに会員制のスポーツクラブを溶け込ませるかに注意が払われた。また、計画地の中心には区所有の水路があり、敷地を分割しているという特異性も特筆すべき条件であった。施設計画においては、建物高さを最小限に抑えたと共に住宅側の開口部はできるだけ小さく、ランダムに配することで、お互いの関係性を保っている。また、ランダムに配された開口部がデザインとしてもリズムを与え、住宅街にあって周辺環境と調和を保つと共に、印象的なファサードを構成している。敷地が分割されているというウィークポイントに対して、逆に与条件を活かし、水路に向かって両建物をカーテンウォールで向かい合わせ、水路を中庭のように設えることで、視覚的・空間的にも一体感を持たせながら、外部から内部が見えにくくなるよう工夫をした。

②地球環境との共生

当建物は、関東では初となる（竣工当時）冷暖房やプールの加温・冷却、風呂の給湯など全システムが電化された施設である。オール電化により、ランニングコストでは年間約1000万円の光熱費が削減できる試算となっており、従来のエネルギー消費から20%の削減を実現することとなる。さらに、すべてコンピュータによる自動システムで稼動し、また夜間に温水や熱源を貯蔵するため、人的な操作も不要で人件費削減につながる上に、ガスや重油を使うボイラーに比べて、安全性も向上しCO2削減などにより、地球環境保持にも寄与できるものと思われる。



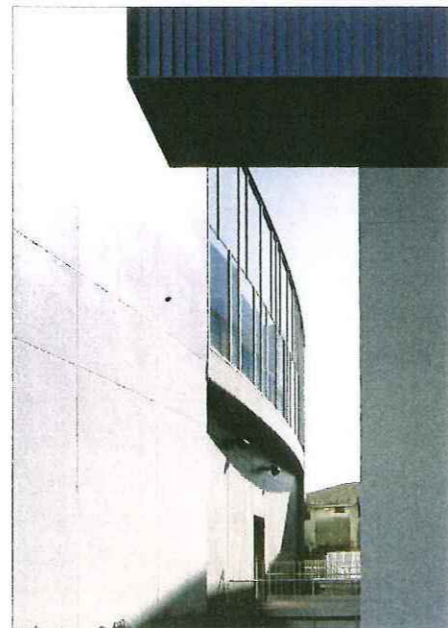
B1F PLAN S=1:500

エントランスホール・吹抜階段等の共用部を水路側に配し、周辺の住宅へ配慮した平面計画としている。また、建物高さを最小限に抑えた中で、3層の象徴的な吹抜を設けることで、空間に広がりを与えている。

吹抜部床、両建物を水路上で繋ぐ連絡デッキ床には自然木を採用し、内外の一体感を演出すると共に、温もりのあるデザインとしている。

また、カーテンウォール方を開口部同様ランダムに配し、両建物の一体感を演出しながらも、利用者のプライバシーに配慮すると共に、空間にリズムを与えている。

カーテンウォールの大開口を建物に挟まれた位置に配することで、日射による熱負荷を軽減することにも寄与している。



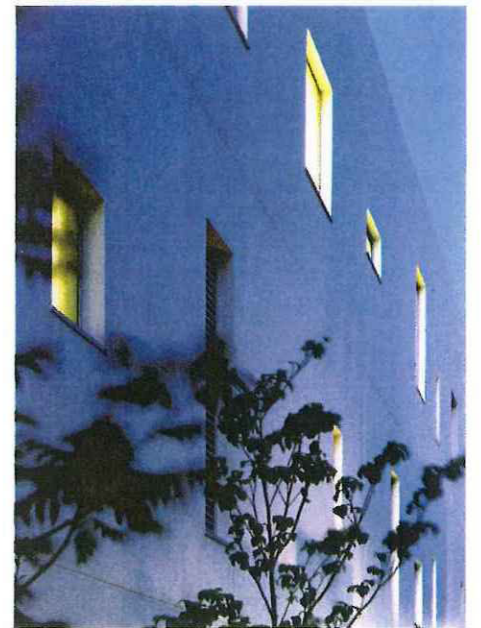
③連絡デッキを挟んだ2棟の関係



④カーテンウォールからしみ出る光



⑤吹抜階段とカーテンウォールの関係



⑥ランダムに穿かれた開口部

作品番号025-3



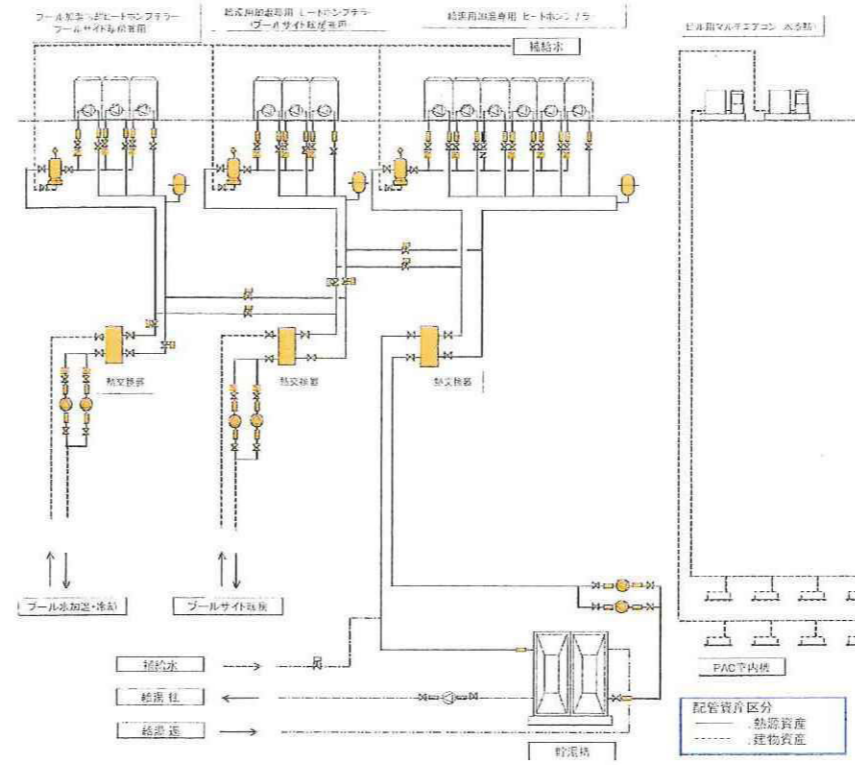
①プール

スタジオ・フィットネスジムについては、隣接する住宅側を設備設置スペースとして、スタジオ等からの音響のバッファゾーンとして寄与すると共に、プライバシーにも配慮した平面計画としている。一方、水路側については全面開口とし、視覚的な繋がりを創出している。カーテンウォール内部に3層吹抜の象徴的な階段を設け、空調負荷の大きいスタジオ・フィットネスジムに対して、ダブルスキンとすることで外気による熱負荷の軽減に寄与している。

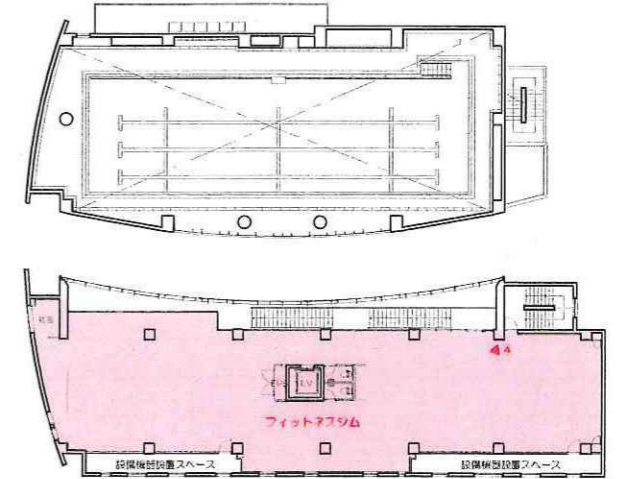
プール室は室温維持のために常に暖房する必要があるが、空気熱源ヒートポンプを屋間も作動させることで、温水暖房が可能となる。夜間につくった温水の追炊きも含めて1つのシステムでプール・シャワーに関するさまざまな局面に対応する。

この結果、温水をつくるのに必要な費用は、電気ヒーターの3分の1以下、ガスや重油を使うボイラーと比べても3分の2以下となると目されている。

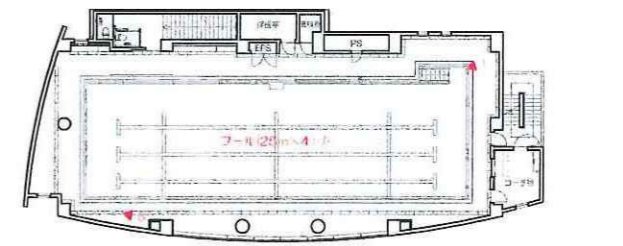
また、プールサイド・プールへの動線にはトップライトによる自然採光を採用することで、エネルギー削減に寄与している。



設備システムフロー図



3F PLAN S=1:500



2F PLAN S=1:500



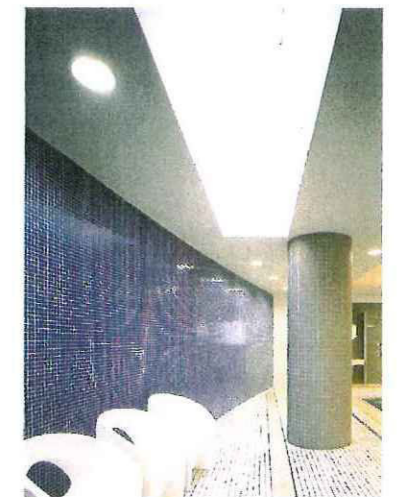
②2階 スタジオ



③3階 ホール

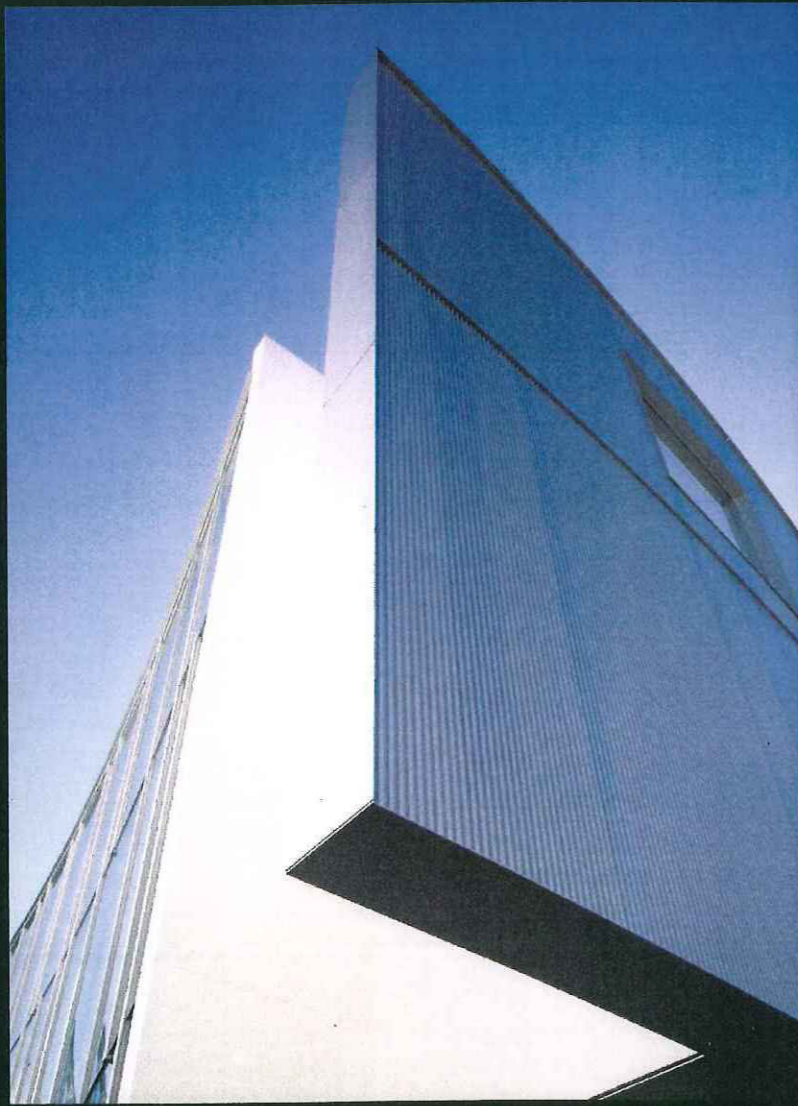


④3階 フィットネスジム



⑤トップライトによる自然採光

作品番号025-4



外観ディテール



連絡デッキ



外観 カーテンウォール



吹抜 風景



レセプションロビー



プール



エステ ホール



クリニック ホール

作品番号025-5

20世紀に入って、建築は「神」から「人間」のものとなった。
21世紀の今日、建築はボクら「人間」のものから「地球」のものへと
その在り方を変えつつある・・・。
それは数千年の時を経て、本来の「人間」と「自然 (=非人間世界) との在り方に
意識が戻ってきたに過ぎない。

「エコロジー」が叫ばれている今日、
本当に「建築」が「生態系」にできることとは何なのか・・・？
「TAMAGAWA BLDG.」が成したことは、その1億分の1にも満たないかもしれない。
しかし、「新たな建築の在り方」の動き始めにおいて、本計画の様なささやかな試みの蓄積が、
数十年後、大きな試みへと変貌を遂げていくことを願って・・・。

